第1回
校庭園庭研究実践セミナー

国際校庭園庭連合日本支部
International School Grounds Alliance - Japan
(ISGA-Japan)

Timetable

9:30～　受付：飯島幼稚園

10:00～11:00　見学会１：飯島幼稚園

11:00～11:20　徒歩移動（飯島幼稚園→飯島小学校）

11:20～12:20　見学会２：飯島小学校

12:20～13:50　ランチ交流会　※自由参加

<セミナー>
14:00～15:00　講演「飯島幼稚園・飯島小学校の園庭・校庭の実践から」
三橋賢次（飯島幼稚園）　尾上伸一（飯島小学校）　他

15:00～16:30　パネルディスカッション
三橋賢次（飯島幼稚園）　尾上伸一（飯島小学校）　他
進行：渡邉英則（港北幼稚園・ゆうゆうのもり幼保園）
指定討論：三輪律江（横浜市立大学）
仙田　考（鶴見大学短期大学部）

グループシェアリング
まとめ

企画趣旨

飯島幼稚園、横浜市立飯島小学校は、子どもたちの屋外での豊かな環境体験を培うべく、多様な園庭、校庭の活動、環境づくりを実践しています。

また横浜市の幼保小連携推進地区（2015-17年度）に指定されたことをきっかけに、園・学校間の交流がより促進し、園庭・校庭でのあそび、環境、交流活動は現在も続けられています。

そして、屋外活動においては、まち・地域との密接かつ積極的な関わり（まちに出て行く、地域を受け入れる）のもとに行われています。

本セミナーを通じて、豊かな園庭・校庭・まちの活動、環境づくりの重要性、可能性について、みなさんとともに考えるきっかけとしたいと思っております。

代表　仙田　考（鶴見大学短期大学）

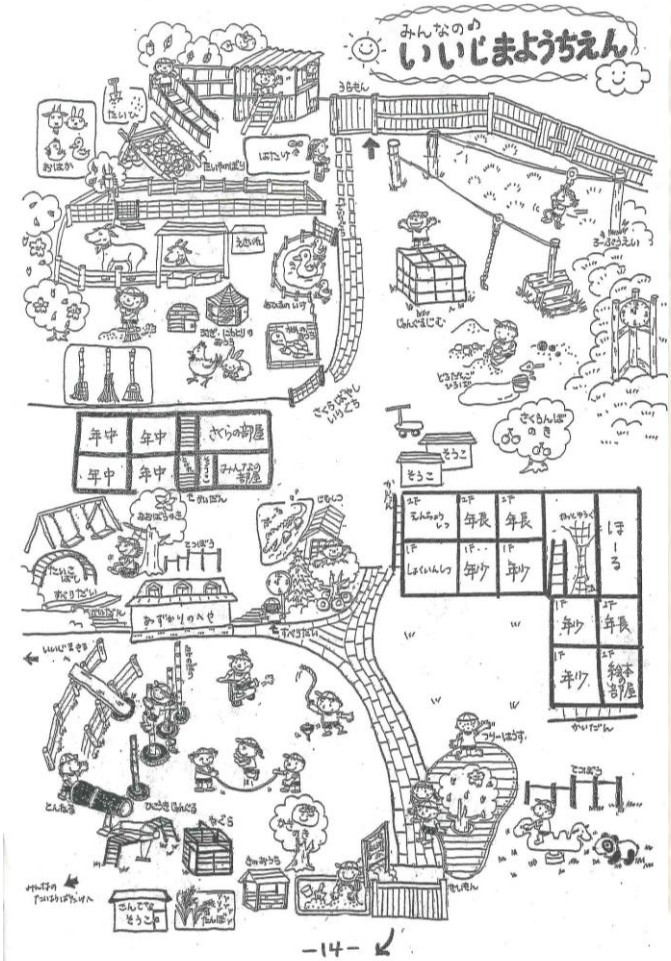
公開園園長挨拶

飯島幼稚園は、先代園長が幼児教育に最適な地形の土地を探し、この地に開園することとなりました。そして、長い年月をかけて、地域の方から土地の寄付などを頂きながら、現在の規模になっています。

飯島幼稚園の恵まれた自然環境の中で、子ども達が遊びから様々なことを学び、また季節の移り変わりを肌で感じ、友達や動植物と沢山かかわることで、やさしさや思いやりの心を持って接することができる子に育ってほしいと願っています。

小学校はもちろん、地域と共に歩んできた園です。園内をじっくり見ていただき、子ども達の息吹を感じ、午後の協議会につなげていきたいと思っています。

三橋　賢次園長（飯島幼稚園）

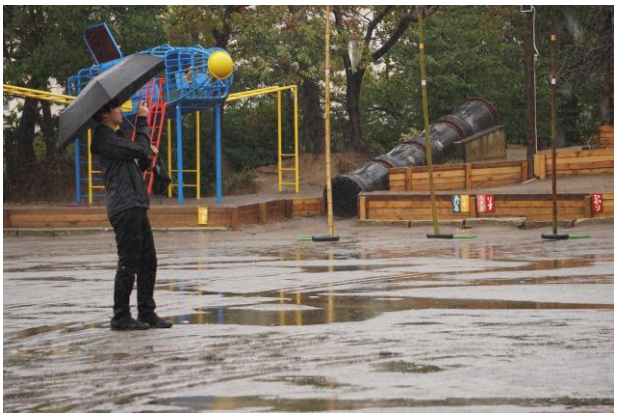


あいにくの天候でしたが、参加者は、何度も滑りながらも山を登り、やぐらから園内を見渡し、山の細道を抜けていました。

子ども達がいないからこそ、どのように使っているのか？　高さはどのくらいか？　素材は？　と、子どもにとってこの環境がどのように使われているのかを想像しながら視察をしました。

また、園長先生をはじめ、参加者同士も対話し、園舎や園庭の工夫についてアクティブに学びを深めていました。

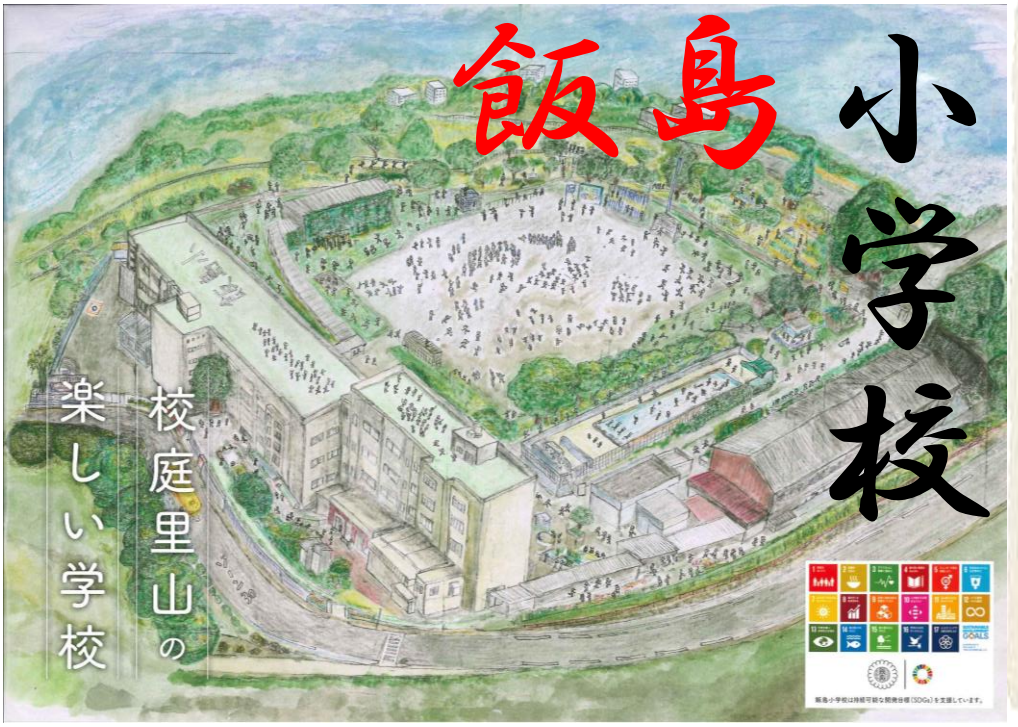
座学の研修ももちろん学びはありますが、実際に見て、触って、体験することで、感覚を伴った学びがありました。



予定にはありませんでしたが、飯島保育園丸山園長先生のご厚意で、飯島保育所の見学もさせていただくことが出来ました。

飯島幼稚園とは異なり、互いが見える広さの園庭でしたが、幼児教育として同じことを地域で目指していることがわかる園庭でした。

園庭は確かに広い方が自由度は上がりますが、築山や遊具を使った工夫で、子ども達の経験はぐっと広がるのだと、可能性を感じました。



そろそろ寒くなってきているのであまり見えませんでしたが、ウナギなどを飼っている池。酸素を送るための気泡が勢いよく吹き出し、直接は見えないけれど、そこには確実に命が息づいていることが伝わる活気がありました。

校庭の各所に、先生方や地域の方が待機していて、見学者に、子どもの様子やその場に対しての熱い思いを聞かせてくださいました。

一人一人の大人が思いと愛情をもって子どもと一緒に場に関わる。そんな空気を感じながらの視察でした。

飯島幼稚園
Presentation

子どもの遊び場には固定遊具と手作り遊具を配置しています。
固定遊具は、分かりやすさがあるため、遊びやすく居心地の良い場所に。手作り遊具には、遊びの多様性と作り手との対話や修理してもらえたという体験があります。
そして自然環境。子ども達自らが関わっていきます。例えば最初は探して集めるだけのダンゴムシ。それが徐々に「石の下にいるかな？」と予想して集めるようになっていきます。
木登りにしても、裏山のアスレチックにしても、子ども達は環境と対話しながら、自分流の遊び方を試しています。
外で遊ぶことで、やり切る楽しさや充足感を感じ、友達とつながり、時に自分と向き合いチャレンジする空間があります。

そして、園庭環境は地域との重要な架け橋となっています。地域住民やお父さんたちが力を貸してくれたり、小学生が遊びに来てくれたり。
今後も、園庭の木々の老木化や落ち葉、地域とよりつながる方法など、取り組むことはたくさんありますが、チャレンジしていきたいと思っています

飯島小学校
Presentation

飯島小学校の実践は、リレー形式で教員と地域の方による怒涛のプレゼンテーションとなりました。
子どもに話しかけることもためらっていた地域の方が今では学校の中心で活動されている話、蛍を呼ぼうとスゲを植え、池の改良を行い、社会科と理科の学習を兼ねて棚田を作った実践。低学年の児童のことを考えた高学年の遊歩道の整備に、果樹園で匂いを感じる体験型の学習活動。特別支援学級のバラ園での実践では、様々な人との関わりが生まれました。そして、地域の方からいただいたものをどうするか？を考えて作った資料館や芝生を植え管理をする子どもたちの物語…。
どれももっと聞きたいお話がたくさんありました。
立地として特別な小学校ではない飯島小学校。校庭の使い方の妙もさることながら、子どもが主役の学校経営の中から生まれるアクティブラーニングと地域コミュニティーの創生が根底にあることが、この学校の真のすごさなのだと感じざるを得ない発表となりました。

Panel　Discussion

仙田考先生より、「校庭園庭とは、自ら様々な観光とかかわりながら生活する中で、こども主体の遊びや学びがしたくなる環境です。もちろん、置かれている環境によって課題は違うが、そのあり様を議論したい」という問題提起から始まったパネルディスカッション。

Q．仙田先生よりどのような環境・関わりが必要ですか？

A．三橋先生
　環境はなくなってしまうと子どもにとって意味をなさない場所になる。虫取りの場所を作りたいのなら、その環境を守る必要もあるため、子どもの声をしっかり聞いていくことが大切。
A．尾上先生
　体験や環境を作っていこうという子どもを育てていきたい。そのためには、子どもが虫を取ってきて『キャーキャー』言っていたら子どもは否定された気持ちになる。

この地域での環境に込められた思いや一貫性が垣間見えるディスカッションからスタートしました。

Q.仙田先生より経験と環境はどのように作っていけますか？

A．尾上先生
　子どもは来ているかどうか？保護者にはどんな人がいるのか？と、丁寧に考えていく必要がある。私の学童期は、絵と虫が好きだったが、勉強はできなかった。しかし、ヘチマの観察をものすごく褒められた。それをとても覚えている。
A．渡辺先生
　（尾上先生の話を受けて）学校に居場所があったり、居心地が良いところがあることが大切。学校の世界に染まりなさいではなく、ほっとしていけるような環境を用意することを意識することから、環境や経験は作られる。

Q．三輪先生より、子どもと何年もかかわっていて、街で会うことはありますか？

A．川越さん（小学校地域ボランティア）
　子どものことは良く知っています。急に化粧したりする変化も見ている。卒業はとてもさみしいが戻ってきてくれるととてもうれしい。

「実は、斜めの関係というのが大切です。親でも先生でもない関係が里山から生まれているように感じました。」という三輪先生の解説から、校庭という環境づくりから生み出される、重要な要素だと気づかされました。

Q．渡辺先生より、幼少連携について聞かせてください

A．三橋先生
　障がいの子が飯島小に行きました。すると校長先生が毎日虫かごをもって校門に立っていてくれたそうです。後で知った話ですが(笑)

A．尾上先生
　当たり前のことですが、飯島幼稚園で遊んだ子が来る。あの環境で遊んだ子をどう受け取るかなんです。保育士さんの温かく包み込むようなかかわりをつないでいきたい。

　互いの環境を教育者が知ることで『面白さがつながっていく』ということが、真の連携になっているのかもしれません。

Group Discussion

発表者・保育関係者・小学校関係者・養成校教員・建築関係者・地域ボランティアの方など、多様な参加者が同じグループでディスカッションをしました。話は付箋に書き出され、対話の中で自分たちの学びを共有し咀嚼する時間となりました。

Ending

私のフィールドは校庭・園庭とまちです。まちにはいろいろな出会いがあります。匂いがあり、季節が変わり…と、五感を使って感じられる空間です。保育園は滞在時間が長いため、散歩を通してまちに出るという文化があります。幼稚園は、滞在時間の短さから、まちに出る機会は少ないかもしれませんが、園庭が豊かな場合もあります。

ただ、そのまちや園庭をどのように活かすのか？が重要です。

例えば、チェキを子どもに持たせて、子どもの目線から発見したものを視覚化し共有するのも面白い試みです。

自然がないと思っている街中や園庭でも、実は自然があり季節が変化していることに気づくことがあります。

未就学児の行動範囲（濃密な時間が過ごせる範囲）は徒歩300mと考えています。高齢者も同じくらいの範囲で行動します。つまり、地域は、生まれたとき・幼児期・高齢期の人によって密な関係が作られているのです。

このことからも、学校や園が地域の中心となり、子ども達と地域の人が主体的に活動でき、くつろげる空間を作っていくということが、改めて大切だと感じました。

副代表　三輪律江（横浜市立大学）